

Every extension of knowledge arises from making the conscious the unconscious.

Library News

Our business in this world is not to succeed, but to continue to fail in good spirits.

What is done can be undone.
Library News
Time flies.
Library News
What is done can't be undone.

contents

目次

特集
貴重本紹介

貴重本紹介シリーズ 2

ロック『利子・貨幣論』イタリア語訳、1751年、フィレンツェ刊



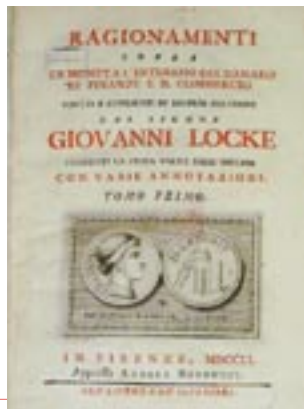
17世紀イギリスの経験論の思想家、ジョン・ロックの著作のなかで、哲学では『人間知性論』（1690年）が、政治学では、『統治論』（後半部は『市民政府論』とも呼ばれる）（1690年）が有名だが、経済学の世界でも、『利子・貨幣論』（1692年）は、古典のひとつに数えられている。

『人間知性論』や『統治論』は、各国語でくりかえし翻訳されているが、『利子・貨幣論』全体の翻訳は、現在までに二種類みられるにすぎない。そのひとつが、ここに紹介するイタリア語訳であり、もうひとつは、はるかに時代がくだって1978年に刊行された日本語訳だ。

イタリア語訳で興味深いのは、写真にあるような二冊本のうち、第二巻に訳者のひとり、パニーニの書いた『物財の正当価格、貨幣の正当な評価、およびローマ人の商業にかんする試論』が、収められていることである。この題名は、すこし見づらいが、下にある二枚の扉の写真のうち、右側の下半部に赤い字で印刷されている。

『試論』のなかで著者は、軍事的征服によって版図を拡大した古代ローマに、商業という平和的手段によって国力を伸張しようとする近代の諸国民を対比させるという歴史的展望をしめす。この商業の世界は、ロックが描きだした、経済学の世界であった。

随想	2
人間生活科学部教授 中野紀和男	
国内外の図書館	3
経済学部助教授 原田 裕治	
読書ガイド	4
経済学部教授 伊藤 幸男	
大学院会計学研究科教授 山本 繁	
短期大学部教授 高田 豊實	
法学部教授 中山 武憲	
学生コーナー	6
人間生活科学部 野中 大輔	
法学部 太田 達也	
経営学部 三輪 真弓	
短期大学部 村上 英子	
図書館からのお知らせ	8



経済学部教授
堀田 誠三

long ago of 随想 on a time. The words dripped on my consciousness. I sank into my being, and carried me away to the

随
想



時代を超えて古人に親しむ



人間生活科学部 教授 中野 紀和男

読書の大きな楽しみの一つは、時代を超えて古人と親しむことであろう。

聖徳太子の17条憲法の名を知らない人はいないだろうが、内容まで詳しく立ち入った人など皆無だろう。私は最近、まったく偶然にその一項目に触れ、目が覚める思いをした。(以下意訳)

「その十、憤りを絶ち、怒りを捨てなさい。他人が自分の言うことに従わないことを怒ってはいけません。人には皆それぞれの心が有ります。他人は私とは違うのです。私だけがどうして物事の道理に通じた者と言えるでしょう。他人が正しければ私が間違っているのです。他人だけをどうして愚か者と言えるのでしょうか。みんな凡夫なのです。お互いに道理に通じた者でもあり、愚か者でもあるのです。他人が人を怒る事があつたら、顧みて自分にしきじりが無いか心配しなさい。自分一人が適任と考えても、皆に合わせて同じ様に振舞いなさい。」……1,400年後の今日でもそのまま当てはまる言葉であり、太子が目の前でわたしたちに話しかけている気がするではないか。

杉田玄白や前野良沢らが、苦心惨憺の上、「ターフェルアナトミア」を翻訳したことを知らぬ人はなからう。その経緯を綴った「蘭学事始」の「あとがき」で福沢諭吉は次のように述べている(一部意訳)。

「杉田が『まるで櫂や舵もない船が大海に乗り出したようなもので、茫洋としてたよるべき所もなく、ただもう呆然としているばかりでした……』と書いてあるのを、私と親友箕作は何度も読み合わせては、先人の苦心を察し、その剛勇に驚き、その誠心誠意に感じ、そのたびに

感極まって泣くのが常だった……」

昔の人たちは、なんと真剣に学問に取り組んでいることか!杉田や、前野ばかりでなく、福沢やその仲間たち……私はこの「あとがき」を、杉田の原文とともに学生の頃から何度も読み返しており、今では暗記できるほどになっている。私自身、大学に入ってから今日に至るまで、一貫して学問・研究に携わってきた。真摯でなければその世界では生きられなかった。絶対に!

しかし、私が杉田玄白や福沢諭吉と同じくらい真摯だったかと自省すれば、彼ら先輩が目の前にいて、コンとやられそうである。

「価値観が多様化した。」「豊かになって生活を楽しむ余裕ができた。」……理由はいろいろ考えられよう。しかし、私を含めた現代人とは、あまりにも懸け離れた、学問に向き合う態度の違いは何ゆえだろう。現在、本学でも検討・実施されている、「私語のない授業」「学生が積極的に興味を持てる授業」「基礎学力アップのための補講」「国家試験対策特別授業」……私も(内心では疑問を感じつつも)真剣に考え、実践している。しかし杉田や福沢らが聞いたらなんと思うだろう。いや、初めからこの状況を理解できないのではなからうか。

このように、読書を通じて100年、1,000年前の人たちの警咳に触れることができるのだ。「最近の若者たちは本を読まなくなった。」とよく言われる。リズムとメロディーだけが重んじられ、歌詞の意味が全く理解できない現代ミュージック……。感性も大切である。しかし、感性と理性、すなわち自ら学び、考え、判断すること、そのバランスこそ肝要ではなからうか。



経済学部 助教授 原田 裕治

フランス国立図書館
フランソワ・ミッテラン館
Bibliothèque nationale de France
site François-Mitterrand

地下鉄6番線 Quai de la Gare 駅を降りて、パリの歴史の薫り残る中心街とは異なる近代的なビルの合間をぬって歩く。この境界は1980年代まで鉄道敷や工場が密集しており、セーヌ川対岸のベルシー地区同様、90年代に入って再開発された地区だ。2〜3分ほど歩を進めると巨大な木製階段に突き当たる。見上げると、階段の向こうに巨大な2つの近代的構造物がそれを挟むようにそびえる。階段を上ると、同じ「塔」が奥にもう2つ存在していたことがわかる。それらは、本を90度を開いた形で長方形の空間を囲むように立っている。フランス国立図書館フランソワ・ミッテラン館である。フランス人の中では、もっぱら“BN”（ベー・エヌ）とか“BNF”（ベー・エヌ・エフ）とか呼ばれている。この図書館、故ミッテラン大統領肝いりの一大プロジェクトとして建設され、当該再開発地区の中心的施設ともなっている。書庫として利用される4つの「塔」に囲まれた面はウッドデッキになっているが、中ほどが大きくくり貫かれ、そこが中庭の松林となっている。肝心の図書館はウッドデッキの足下に回廊形式で広がっている。ちょうど松林に降りていくようにエスカレーターを下ると図書館の入り口があり、中に入るとゆったりとしたフロアーが広がる。中庭を取り囲む回廊内側の壁は全面ガラス張りとなっており、松林の



緑と柔らかな日差しが降り注ぎ、金属と硝子で組まれた建物の無機質な雰囲気や霧気を中和してくれる。

閲覧室は、一般利用者用のオ・ド・ジャルダン（上階）と研究者用のレ・ド・ジャルダン（下階）の2層に分かれている。レ・ド・ジャルダンには2,000の閲覧席が用意され、事前に席を指定して利用する。ただし、ここを利用できるのはその必要性が認められ者だけである。オ・ド・ジャルダンは、利用料を払えば誰でも自由に利用することができ、閲覧室は哲学・歴史・人文科学、法律・経済・政治学といった分野ごとに分かれている。閲覧席は約1,600、平日でも大学生を中心に多くの利用者が訪れ、おおかたの席は埋まっている。賢明王シャルル5世の個人的ライブラリー以来蓄積されてきた1,000万点の収蔵図書のうち約58万点は自由に手に取ることができる。残りについても、予めインターネットで予約をすれば、来館してすぐに希望図書の閲覧が可能である。

館内では観光客を見かけることもしばしばであった。そこで催されるさまざまなエキスポジションを見学を訪れることもあろうが、モダンなデザインの外観と図書館が醸し出す知的で落ち着いた雰囲気や霧気が人々を引き寄せるともかもしれない。この図書館を中心とした境界は、パリの異なる一面をわれわれに見せてくれる。旅行の折りにちょっと立ち寄られてみてはいかがだろうか。

稲盛 和夫 著

『稲盛和夫のガキの自叙伝』

(261 頁) (日本経済新聞社)

『生き方』

(246 頁) (サンマーク出版)



経済学部 教授
伊藤 幸男

ノーベル財団に賞を贈った男、こんな人のことを知っていますか。稲盛和夫・京セラ名誉会長がその人です。

稲盛和夫さんは昭和59年(1984年)、数百億円もの私財を投じて財団を設立し、「謙虚にして人一倍の努力を払い、道を究める努力をし」、また、「その業績が世界の文明、科学、精神的深化のために、大いなる貢献をした人」に対して贈呈する「京都賞」を創設しました。翌年第一回授賞式が行われましたが、そのときノーベル賞を贈るノーベル財団に対してもその長年の功績を称(たた)えて特別賞を贈ったのです。ノーベル財団関係者はこれを喜び、スウェーデン王国シルヴィア王妃陛下ほか、財団理事長、専務理事、全審査委員長らが来日、式典に参列されました。痛快な出来事でした。それ以来毎年秋授賞式が行われ、平成17年秋で21回目になります。

稲盛さんはなぜ京都賞を創設したのでしょうか。きっかけはいくつかあったようですが、根本的には「世のため、人のために尽くすことが人間として最高の行為である」という人生観によります。稲盛さんの人生の軌跡(きせき)をみればそれが口先だけの世間体のいいスローガンではなく、本当に実際の行動で裏付けられていることがわかります。

稲盛さんは経営者です(最近第一線をしりぞきましたが)。彼は昭和34年(1959年)春、弱冠26歳の時、「京都セラミック」(京セラ)を起業しました。総勢28人。ほとんどが20代の若者。

昨今は若者の起業はベンチャー起業などともてはやされ、支援を得られることも少なくないようですが、「京都セラミック」はそんなに華々しくスタートしたわけではなかったのです。第一、会社は間借り、小さな町工場に過ぎなかったのです。いつぶれても不思議はない。

しかし、稲盛青年たちは大志を抱いて、働きに働き、苦心に苦心を重ね、今では「京セラ」と言えば日本を代表する超優良企業の一つになっています。

そんな企業を育て上げた優れた経営者の稲盛さんですが、大学卒業時には採用してもらえない会社もなく、やけになってヤクザになってやろうかと本気で思ったこともあったそうです。そして、やっと入れた会社は今にもつぶれそうな「ボロ会社」。やる気は失(う)せ、転職を試みるも、それもうまくいかず、どうにも情けない青春の日々だったそうです。

そんな稲盛さんが、どういう道をたどって立派な経営者、すばらしい人間になったのか、『ガキの自叙伝』を読むとわかります。人間、どのような考えをもたなければいけないか、それを教えられます。

『生き方』は稲盛さんの考えの集大成です。簡単に分かり、たやすく真似のできる生き方ではありませんが、何か学べるところがあるでしょう。

「少(わか)くして学べば、壮(そう)にしてなすあり」(若いうちに一生懸命勉強し、苦労すれば、3・40歳台になって大きな価値あることを成し遂げることができる)

若者よ、志を高く掲げよ。

山田 真哉 著

『さおだけ屋はなぜ潰れないのか？
—身近な疑問からはじめる会計学—』

(216 頁) (光文社新書)



大学院会計学研究科 教授
山本 繁

最近、活字離れの現象の現われか出版物の文章、内容がやさしくなっている傾向が見られる。やはり本は出版したからには読んでもらわなければならない。そのためか専門分野で書店に入ると『××入門のための入門書』の出版物が目立っている。

取上げた本書も会計学の入門のための入門書のひとつである。著者は、公認会計士で前著に『女子大生会計士の事件簿』シリーズを出版している普及本の一連の著作のひとつである。今回もユニークな本の題名で出版され、ベストセラーのひとつとなっている。

本書の内容は、エピソード1~7までからなり、エピソード1が本題名となっている。以下、2 ベッドタウンに高級フランス料理店の謎—連結経営—、3 在庫だらけの自然食品店—在庫と資金繰り—、4 完売したのに怒られた!—機会損失と決算書—、5 トップを逃して満足するギャンブラー—回転率—、6 あの人はなぜいつもワリカンの支払い役になるのか?—キャッシュ・フロー—、7 数字に弱くても「数字のセンス」があればいい—数字のセンス—の項目のもとで、会計学の知識を身近な問題から説明している。まさに会计学入門の入門書で、本書の意図する“大ざっぱに会計の本質をつかむ”ために手軽に読める目的を果たした適書である。また、本書の出版の意図に“会計そのものに興味を持ってもらう”ことが学問への動機づけとなることに同感である。私も学生諸君が興味を持てば自分で学び始めることができると確信している。まず学生諸君が、身近な疑問からスタートして、本の世界に歩みだす手がかりのひとつとなれば幸いである。

読書ガイド

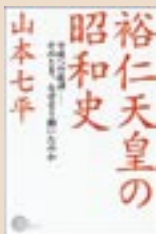
読書ガイドで紹介した本は図書館にあります。ぜひ一読ください。

山本七平著
『裕仁天皇の昭和史』
(359頁) (祥伝社)



短期大学部 教授
高田 豊實

この本の原題は『昭和天皇の研究』で、平成元年に刊行されたものである。著者山本七平は大正11年に生まれ、平成3年に没した。著者最晩年の作品である。



この本は、昭和天皇は自ら天皇であることをどう考え、どう「自己規定」していたのか、そしてそのことが昭和史における天皇の行動にどう影響したのかという点を解き明かそうとしたものである。その焦点は言うまでもなく、日中戦争および対米英戦争そして敗戦にいたる激動の昭和前期に合わせられている。昭和天皇は戦争を終結させ得たのに何故開戦を止められなかったのか。今日なおこの問いが発せられることがある。昭和天皇の答えは明確である。自分は帝国憲法の規定に従い行動したのであり、政府が憲法のルールに従って上奏したことに關してはこれを裁可しないわけにはいかなかった。たとえそれが自分の意に反したものであったとしても、である。ところが戦争終結に際しては内閣で意見がまとまらず、鈴木貫太郎首相の要請に基づいて裁断を下したのであって、これは憲法の規定を踏み越えていた。これが天皇の認識であった。

かつて2・26事件の首謀者たちは「天皇親政、憲法停止」を目指したが、天皇はこれを断乎として拒否し、彼らを反乱者と決め付けて一顧だにしなかった。

昭和天皇は立憲君主に徹しようとした。その結果としての国の大敗を受け、そのすべての責めを負って、マッカーサー元帥に対し自らを差し出したのだ、というのが著者の結論である。

角田 房子著『閔妃暗殺』
(368頁) (新潮社)



法学部 教授
中山 武憲

金薫著／蓮池薫訳『孤将』
(310頁) (新潮社)

はじめに、衝撃的な架空話をお話しよう。

皇后陛下が外国の暴漢に殺められたら、国民は、いかに思うであろうか。あまりに突飛な架空話に、皆さんは、呆れ返られたことであろう。



しかし、この架空話が、110年前、現実の事件となったのである。しかも隣韓国で。外国の暴漢とは日本人、首謀者は、あることか時の日本公使・陸軍中将三浦梧楼、悲劇の皇后は、李朝末期の皇帝高宗の妃・閔妃（明成皇后）、いわゆる乙未事変である。

私の研究室の机の上には、ソウル景福宮内・閔妃遭難の地にひっそりと立つ同皇后殉難碑の写真とともに、釜山・竜頭山公園に雄々しく聳え立つ李舜臣將軍の像の写真が飾ってある。

李舜臣—壬辰倭乱（日本でいう文禄・慶長の役）の際、侵略者豊臣秀吉の軍をことごとく撃破し祖国を防衛した李朝水軍の提督である。將軍が乗船し全軍を指揮した船の名は、その形にちなんで「コブクソン（亀甲船）」として、今も韓国を代表するタバコに付されている。

※ ※

本日ご紹介するのは、『閔妃暗殺』（角田房子著）及び『孤将』（金薫著・蓮池薫訳）である。

『閔妃暗殺』は、文字どおり同事件について記したノンフィクション小説である。著者角田房子氏が事件解明のために捧げられた努力・情熱は、真に敬服に値する。著者のこの努力・情熱を支えたものは、著者が自ら言われるように韓国に対する「申し訳なさ」であり、その先には、両国友好への熱き想い、切なる願いがある。

『孤将』は、李舜臣將軍の生きざまを記したものである。本書は、その内容もさることながら、拉致被害者蓮池薫氏の翻訳であることにより、我が国に広く知られるところとなった。国難に際し、その身を賭して国に殉じた男の姿は、民族の違いを超えて人々の心を打つ。

※ ※

日本人の中で、閔妃暗殺事件、そして李舜臣將軍のことを、果たしてどれだけの人々が御存知であろうか。

日韓に今なお横たわる深い溝。その責任の多くは、我々日本人の側にあると、私は思っている。



猿渡 瞳 著 『瞳スーパーデラックス』 を読んで

人間生活科学部 野中 大輔

「**「生きている**というこ
とはとても幸せなことなのだ」と考えさせられたのがこの本だ。私は日ごろ病気などしないから、健康について関心がなかったが、この本は命の大切さについて真剣に考える機会となった。

この本の著者である猿渡瞳さんは骨肉腫という骨のガンのため、13歳という短い生涯を終えた。しかし彼女は病に苦しめられながら、普通の13歳だったら考えもしないような夢を見ていたのだ。それは、世界中の人々の病気を治してくれる最高の薬があったらという夢だ。13歳という年齢は、自分のことだけを中心に考え、社会がどうなってほしいとか普通考えないことが多い。まして不治の病を患っていれば当然

であろう。

僕の心に一番響いたのは、「骨肉腫ありがとう」という一文だった。瞳さんは全身にガンが転移して、手足を動かさない状態であるにもかかわらず、骨肉腫になったおかげで、ガンの痛みを知った。そして13歳の年齢でガンと真剣に向き合い、それに立ち向かう勇気があれば、世界中でガンと戦っている人々を助けてあげられると、穏やかな顔で告げたのだ。

この本は、命の尊さということを再認識し、生きていることということが、何よりも素晴らしいことだと気づかせてくれた本である。



島田 洋七 著 『佐賀のがばいばあちゃん』 を読んで

法学部 太田 達也

小学2年の昭宏はばあちゃんの家^のに預けられて高校^{まで}を佐賀で過ごす。「ばあちゃん、この2・3日^で飯ばかりでおかずがないね」と昭宏が言うと「明日はご飯もないよ」と笑いながらばあちゃんが答え、二人は顔を見合わせて笑ってしまう。苦手な英語のテストには「私は日本人です」、歴史は「私は過去にはこだわりません」と書けばいいという。「あんまり勉強ばかりしてたら癖になるよ」という言葉には笑ってしまった。

この本を読んで私は祖父母を思う。幼いときの火傷で手の指の動きが不自由な祖母は、縫い物、料理、畑仕事に冬の雪かきまで他人のやることは全部してしまう。死んだ祖父は小学校に行く暇もなく、

漢字は苦手だったが、懸命に字を覚えて郵便配達でがんばった。

佐賀のばあちゃんもがばい(すごい)が、私のじいちゃんとはばあちゃんも負けずにすごいと思った。



秋タカシ 著『ワールズ・エンド』を読んで

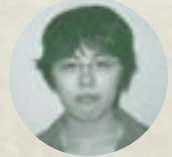
経営学部 三輪 真弓

最近若者の 活字離れが問題になっているが、本をむずかしいものと思っているのが原因のひとつではないだろうか。小説は一人ひとりにとって、個性があつて相性があつてもいいのではないだろうかと思つてみる。自分で気に入つた本を探してみたら、本を読む楽しさを実感すると思つた。

『ワールズ・エンド』は人気作品で、私のお勧めする一冊の本です。

魔法使いの卵たちの少女たちが、男子禁制全寮制の魔法の学校で一人前の立派な魔法使いになるために、世界の果て“end of the world” すべてが終わり、す

べてが始まる場所でルナ（主人公）も含めた、カーマイン・セレス・ネロの4人の魔法使いとしての心の成長を描いたストーリーです。



女の子たちが一人ひとり、とってもほんわかとしていて可愛いです。

ファンタジーな絵本のような世界に、疲れた心が癒されます。

2時間くらいで読めるので、小説が苦手な人も、小説になれていない人にもお勧めの本です。

重松 清 著『流星ワゴン』を読んで

短期大学部 村上 英子

自分の思う 人生の岐路と、実際の人生の岐路とは少々違っているらしい。

そう思つたのはこの『流星ワゴン』を読んでからだ。「死んでもいいかな」と思つている主人公の前に、時を遡る流星ワゴンが現れる。息子は不登校、妻とは離婚寸前、自分はリストラされる。いつからこんな風になったのか？その度に人は「あの時こんな行動を取つていれば、もっと違った対処をしていれば」などと考えるだろう。そしてワゴンは主人公を乗せて時を遡る。自分の人生の岐路にもう一度立たされた彼は、自分の人生をあらためて見つめなおすことになる。

主人公は38歳の男性で所帯持ち。それなのに私はこの主人公と同じ気持ちを何度も味わつたことがあると感じた。誰でも人生の中で反省や後悔はあるだろう。

しかし彼はその事実をあまり受け止めようとしなかった。私にも似たような部分があると思つた。どこかで仕方がないだろうと思つてしまうのだ。でも、もう一度だけ失つた時間を取り戻せたら、私ならどう動くだろう？この主人公のように自分を見つめなおせるだろうか？

自分自身を見つめなおすと言うのは想像以上に勇気がいることだと思う。自分の失敗や過ちを言い訳せずに直視出来る自信はあまりない。しかし、きっといつかは自分自身を見つめなおさなければならない時が私にも来るだろう。その時、私はきっとこの本のことを思い出すと思つた。



学

生

コ

1

ナ

1

お知らせ Information

Our business in this world is not to succeed, but to continue to fail in good spirits.

■名古屋経済大学図書館ホームページからのご案内

●今回はインターネット・データベースの内、大宅壮一文庫 Web を紹介します。

Webをクリックすると、下のページが表示されます。これは、雑誌専門図書館『大宅壮一文庫』(国内の週刊誌、総合誌、女性誌 収録)の雑誌記事索引検索Web版です。

キーワードからどの雑誌の何ページに出ているか検索できます。検索結果から図書館OPACでその雑誌があるかどうか調べてください。直接、「大宅壮一文庫」へ複写を申し込む場合は有料です。

画面左上の「ログイン」をクリックして検索してください。

利用終了後は必ず「ログアウト」をしてください。



図書館2階パソコンコーナー・情報センター・サテライト・研究室より利用できます。

なお、図書館2階～5階のOPAC検索端末からは利用できません。

冊子体で『大宅壮一文庫雑誌記事索引目録1985-1995』が、5階エレベーター前右側の低い書架にあります。

■図書館での展示会

本年度より図書館1階エントランスホールで学生サークル、教職員、地域の方のご協力により展示会を開催しています。特に好評だったのは、「嶺」TAKANEという山岳写真集団(県内に在住のアマチュア写真家)の展示でした。山の専門誌GAKUJIN「岳人」7月号等で写真賞を受賞するなどプロ級の腕前で、迫力のあるすばらしい作品を、学生、教職員はもちろん学外の方も熱心に鑑賞していました。今後も写真・絵画を中心に展示する予定です。ぜひ図書館に足を運んでください。学習や研究の合間に、図書館で日常とは違う世界を感じるのもいいのではないのでしょうか。



図書館だより Vol.50 2005.11

発行所 名古屋経済大学 図書館
名古屋経済大学短期大学部
発行 年2回
印刷所 株式会社 一誠社 TEL (052) 851-1171

〒484-0000 愛知県犬山市樋池 61-22 TEL (0568) 67-3798 (代)
ホームページ <http://www.nagoya-ku.ac.jp/lib/index.html>